

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

AD/HDの薬物療法
——メチルフェニデートを巡って——

コーディネーター 渡辺 義文

短時間作用型メチルフェニデート（リタリン）の乱用（依存）が社会的問題となるなかで、平成19年12月、適応疾患についてナルコレプシー以外の難治性・遷延性うつ病が適応削除され、メチルフェニデート徐放剤（コンサータ）がわが国で初めてのAD/HDの適応薬剤として認可されるという大きな変化がみられた。さらに、乱用の防止、適性使用を目的として、使用医師の登録制度ならびに流通管理委員会（有識者による第三者委員会）が発足している。殊にコンサータ使用については、メチルフェニデートの依存に関する講習会への出席が登録の必須条件となっている。

以上のようなメチルフェニデートの使用を巡る激変に加え、これまで児童の問題として我々精神科医が重要視してこなかった広汎性発達障害、AD/HDの成人期における対応・治療の問題が近年クローズアップされてきており、一般精神科医にとり広汎性発達障害、AD/HDの疾患理解ならびにメチルフェニデートの適正使用に関する理解の促進は重要な課題と思われる。特にAD/HDについては成人後の依存の問題を見据えて、どこまで薬物治療の可能性、必要性があるのかを真摯に考えていく必要があるものと思われる。

以上の視点から、本シンポジウムではAD/HDの疾患理解、メチルフェニデートを中心とした薬物療法と依存の問題、成人AD/HDの治療につ

いて、児童精神医療の専門家以外の精神科医も広く対象として企画された。

齊藤万比古先生はまずAD/HDに対する心理・社会的治療について解説され、AD/HDへの包括的治療のなかでの薬物療法の位置づけを明確にするとともに、メチルフェニデート以外の多彩な薬物療法の工夫についても詳しい説明をし、AD/HD治療の全体像を明らかにした。岡田俊先生はAD/HDの生物学的側面からの疾患説明を行い、それに基づいたメチルフェニデートの脳内薬理作用の説明をした。さらに、臨床薬理学的側面から、短時間作用型であるリタリンの問題点をリバウンド、依存の視点から説明するとともに、徐放剤コンサータの臨床効果ならびに有用性を整理した。曾良一郎先生は依存形成の生物学的機序を、中脳辺縁系ドーパミン神経系における報酬系を基盤に解説した。さらに、ドーパミン・トランスporter阻害作用をもつメチルフェニデートが、野生型マウスでは活動量を増加させるのとは対照的に、ドーパミン・トランスporter欠損マウスでは活動量を低下させることからAD/HDの動物モデルとされていることなどAD/HDの生物学的疾患解説を行った。松本英夫先生は成人期AD/HDの臨床像について、不注意症状が主症状となり、多動・衝動性は軽減するが、反社会性人格障害やアルコール・薬物依存などの並存障害が

多くみられるなどの問題点を含めて具体的な説明をした。さらに、成人期 AD/HD へのリタリンによる薬物療法の有効性について、自験例を中心に解説した。

本シンポジウムでは会場外まで多くの立ち見の聴衆であふれ、成人期 AD/HD やメチルフェニデート問題に対する関心が極めて高いことがうか

がわられた。シンポジウムの内容も講師の先生方のご努力下、一般精神科医にとってもわかりやすく整理されたものであった。本シンポジウムをきっかけとして、一般精神科医のなかに成人期における AD/HD とその薬物療法に関する正しい理解が促進されることを希望してやまない。
